

---

# **月読の塔の姫君 番外編**

館野和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月読の塔の姫君 番外編

### 【NZコード】

NZ8847P

### 【作者名】

館野和

### 【あらすじ】

月読の塔の姫君の番外編集です。  
三人称、別キャラ視点の物語。

稀代の魔術師。

それがキースの世間一般での呼び名だつた。  
強大な魔力を持つて生まれた彼は、さしたる障害もなく若くして  
その地位に上りつめた。

生まれの高貴さも後押しして、人々は彼を賞賛する。  
けれど、彼にはそんなことはどうでも良かつた。

魔術自体は嫌いではない。ただ、大抵の魔術を操れてしまうのが  
退屈だつた。

けれども、そんな彼にも歯が立たないものがあつた。 伝説の  
姫君が眠るとされる月読の塔だ。

いつしかキースは、塔の研究に夢中になつていた。  
いつか、あの塔の結界を破るのは自分だと信じていた。 …… 異変  
が起ころるその時までは。

その異変に気が付いたのは、塔の結界が突然消えたことからだつ  
た。

いかなる者をもばむ月読の塔。そこには、古の王アークリッド  
が愛した妃が眠ると言われている。

キースが移動魔法で塔に入つてみると、伝承の通り、イルーシャ  
姫が眠つているとされる寝台が置かれていた。

ただ、その寝台はもぬけの殻。寝具に残る温もりだけが、たつた  
今まで人が眠つていたと知らせていた。

「これは……イルーシャ姫？」

どこか異質な魔力を辿り、その人物の前に移動してみれば、そこ

には伝承通りの姫の姿があった。

淡い色彩と、可憐さを残す絶世の美貌。

驚いたように瞠目するイルーシャ姫に騎士の礼を取ると、予想もしない反応が返ってきた。

「あああの、あの……っ」

真っ赤になつて動搖する姿にキースは違和感を覚える。

古の王妃なら、こんな禮で動じたりしないはず。

「なにか変だな。君はイルーシャ姫だよね？」

「人違いですっ」

首を振つてイルーシャ姫が否定する。

姫が言うにはハラダユキという名前でニッポン人だということだった。

聞いたことのない響きに聞き返すと、何度も訂正された。

「もうヨーキでいいです……」

どうやっても発音できないキースに、姫の姿をした目の前の娘は仕方なく諦めたようだった。

「話を戻すけど、君は姿はイルーシャ姫だけど、中身はヨーキっていう女の子なのか」

話しかけた年若い女性という推測をしたが、これは間違つてはいなかつたようだ。特に否定もされず、「イルーシャって誰ですか」という疑問だけが返ってきた。

「伝説の姫君。月読の塔の眠り姫だよ」

「はあ、でんせつのひめぎみ、ですか」

どうやら胡散臭いと思われているらしい。棒読みで返すその様子に思わずキースは苦笑した。

「ああそうか。君はまだその姿を見ていないんだね？　なら、信じられないのも無理ないか」

キースは移動魔法で王の居住区に最も近い賓客用の一室に移動する。

「え、ええええっ！？」

「なんだか随分驚いてるようだけど、ひょっとして移動魔法を知らなかつたりする？」

「魔法という言葉は聞いたことはありますけど、実際に見たのは初めてです」

……どういひじだらう。魔法の概念があるのに、実行はされていない？

力の大きさや、実行できる魔法に差はあるけど、世界中でごく当たり前に魔法は使われている。

世界に轟いてる伝説の姫君の名を知らないこととい、この世界には存在しないニッポン出身と言つたこととい、この娘はひょとしたら、異世界の人間なのだろうか。にわかには信じがたいが、その可能性が高い。

けれど、その前にこの娘にこの状況を知らせなければいけない。キースはイルーシャ姫の姿をしているユキを鏡の前に連れていく。ユキは鏡を見てぽかんとすると、事態がまだ飲み込めていならしく、いろいろな動作を試みていた。

おもしろい娘だな。

キースは笑いたいのを堪えていたが、やがて状況を把握したらしいうキが絶叫したので、どうにも我慢できずに爆笑してしまった。

「ちょっと、笑いすぎ。失礼です！」

この美貌で涙目になつて抗議する姿は田の毒だ。本人は全く気づいていないようだけれど。

「ごめん、ごめん。まさか叫び出すとは思わなくて。でも、これで状況は理解できたみたいだね。……姫が目覚めたとなつたら、王に知らせないとならないんだけど」

そう言つたら、ユキは顔色を変えた。

「わたし、王様に会わないといけないんですか？ それにここはどこなんですか？ わたし、これからいつたいどうなるんですか？」

ユキはだいぶ混乱しているようだ。……無理もない。

「ここにはガルディア王国。君から見ればたぶん異世界だよ。ここに

は二ツポンなんて国は存在しないしね」

「異世界……？ 嘘……」

ユキが呆然としたようにキースを見る。その目には涙が浮かんでいた。

「……ああ、泣かないで。酷かもしれないけど、絶対に悪いようにはしないから」

突然のことに混乱しているのだろう少女にキースは同情した。知らない土地に一人で放り出されてさぞ心細いだろう。これから、なるべくこの少女の面倒を見るようにしようとキースは心に決める。「そのためにも王と会うことは重要なんだ。いきなり王と対面なんて不安かもしれないけど、僕も同席するから我慢してね」

そつとキースが彼女の頭を撫でると、ユキは頷いた。

早速、カディイスに報告しようとして身を翻すと、ユキに呼び止められた。うつかりして自分の名前を名乗るのを忘れていたらしい。

キースが名乗ると、ユキは「こちらこそ、よろしくお願ひします」と礼儀正しく返してきた。それなりに素養のある娘なのかもしれませんとキースは思しながら、王であるカディイスに報告に行つた。

カディイスのユキに対する態度は、はつきり言つて最悪だった。

伝説の姫君が目覚めたら、その代の王か王子が、アークリッド王の生まれ変わりであるという諸説をカディイスは普段からこき下ろしていたので、イルーシャの姿をしたユキと彼を引き合わせればこういつた展開も考えられたのだ。迂闊だった。

カディイスの口調は普段でもきつい。その上で、辛辣な言葉を重ねるのだから、キースはユキが泣き出してしまうのではと内心ハラハラしていたが、実際の彼女の反応は彼の予想に反するものだった。「いくらなんでも、そこまであなたに言われる筋合はないですよ」「俺にはそう言える権限がある。王だからな」

「へえ、そつなんですか。だとしたらとんでもない暴君ですね。こんな王様を上に戴いてる国民が可哀想」

「なんだと、もう一度言つてみろ」

「何度もって言うわよ！ 暴君！ 暴君！ 暴君！ 暴君！」  
ここまでカデイスに言える娘もすこいなと、キースは剣呑な空氣の中で暢気に感心していた。

「きわま……」

「だいたいなに、田覚めたら見たこともない場所で、伝説の姫君とか言われて、あげくの果てには一度と田覚めるな？ ふざけんじやないわよ」

彼女の言い分はもつともだ。カデイスは言い過ぎた。  
感情が高ぶってきたのか、ユキの瞳に涙が浮かぶ。

「わたしだってね、好きでこんなとこにいるんじゃないのよ！ 元の体に戻れるなら喜んで戻つてやるわ！ 分かつたか、この馬鹿王

「！」

ユキが叫んだ言葉にキースの思考が停止した。

カデイスに馬鹿王つて……。

次の瞬間には、キースは体を折つて爆笑していた。

この娘、おもしろすぎまる。

せいぜいと肩で息をするユキと、唖然とするカデイスを傍目にキースは笑いを治めるのに必死だった。

「キース、この女を追放しろ」

「お言葉だけどね、カデイス。この国にとつて貴重な観光資源をみすみす追放させる訳にはいかないね」

なにも知らない彼女を追放など、冗談ではなかつた。

そこで、キースはもつともらしい理由をつけて、カデイスの説得

を試みた。

「伝説の姫君が目覚めたことで、この国にもたらされる経済効果は計り知れない。それを他国に持つて行かれるかも知れぬけど、それでもいいのかい？」

「それは……」

キースがたたみかけるように言うと、カデイスの言葉が詰まる。「じゃあ、わたしはこの国にとつて大切な客人なわけね？　じゃあ、せいぜい丁重に扱つてもらわなくちゃね。よろしくね、カデイス！」嫌味を含ませてカデイスを呼び捨てにするユキは、いつそ小気味よかつた。

弱そうに見えたのに、したたかな面も持つている少女。先程は礼儀正しかつたが、結構口も悪い。

「君もいい性格してるよなあ」

キースは感心したように笑うと、ユキに言った。

「カデイスを呼び捨てにするなら、僕もキースと呼んでもらおうかな。丁寧な言葉もいらないから」

伝説の姫君の姿をしているのに、中身は異世界出身の少女。その特異性もキースの興味を引いたが、それ以上に少女自身に惹かれた。

口が悪くて、弱いかと思えば強くて、その上やることは思いもかけなくて、見てて飽きない。キースは、この少女と仲良くなりたいと強く感じた。

「え……ど、キース？」

「うん、そう。カデイスばかり親しげに名を呼ばれたら、ちょっと癪だしね」

「誰が親しげだ！」

カデイスが叫んだけれども、キースは笑つてそれをかわした。ユキも呆れたようにこちらを見ている。おそらく、カデイスの意見に同意なのだろう。

その時、扉が叩かれ、キースはその応対にでた。

ふと振り返ると、カティスと睨みあう少女が見えて、キースは密かに笑つた。

順風満帆だけれど、退屈な日々。

それが、あの少女によつて変わっていくよつた予感をキースは確かに感じていた。

## 邂逅／カディス／本編5話まで

「……塔の姫が目覚めただと？　なにを馬鹿なことを言つてゐる」にわかには信じがたい報告を従兄弟であるキースから受けて、カディスは瞠目した。

「信じられないのも無理はないけどね。事実だよ、カディス。彼女はもうこの王宮にいる」

稀代の魔術師であるキースが言つからには、確かに事実なのである。

しかしながら、よりによつてこの時期に。

つい先日、非公式とはいへ、エトール侯爵にアイリン姫の輿入れの打診をしたばかりだ。

アイリン姫は愛らしい容貌の持ち主で、純粹な性格、なにより貴族の姫にありがちな人形めいたところがないところに、カディスは好感を持っていた。

カディスは舌打ちしたい気分で、キースに言つた。

「その女をここに連れてこい」

「……ここに？　仮にも古の王の妃だった姫だよ？　謁見の間の方がいいんじゃ？」

「俺は忙しい。一人の女のためにわざわざ時間をさしていられない。……分かつたら、とつとと連れてこい」

カディスがにべもなく言い切ると、キースは諦めたように肩を少しそくめた。

「分かつたよ。彼女の支度ができたらすぐに連れてくる」キースが出ていった扉を見やり、カディスは呻いた。

「……なぜだ。なぜよりによつて、俺の時に……」

月読の塔の姫君、イルーシャ。

既に伝説となつて五百年の月日がたつ。

正直に言つと、カディイスはイルーシャといつ姫君に良い印象を持つていなかつた。

アーフリッド王をその美貌でたぶらかし妃になつた後、謎の魔術師によつて眠りにつき、王のその後の人生を狂わせた毒婦。それが、カディイスのイルーシャ像だつた。

現れたイルーシャ姫は、カディイスの予想に反して、清楚だつた。月光のような緩く波打つ髪と、淡い青の瞳。

確かに絶世の美貌だが、まだ少女と女性の間の年齢に見えるためか随分と可憐に見える。そして不安そうに揺れる瞳もそれを助長していた。

「あの……」

「なぜ、よりによつて俺の代になつて田覓めるんだ、おまえは」なにかを言いかけるイルーシャの言葉を遮つて、カディイスは彼女に苛立ちをぶつける。

周囲の意見におもねて、他人の女だった者を妃に据えるなど冗談ではなかつた。

そう思つてカディイスが言葉を連ねていると、最初は戸惑つていた様子の女が突然怒りだした。

「とんでもない暴君ですね。こんな王様を上に戴いている国民が可哀想」

王としての誇りがあるカディイスには、この言葉は聞き捨てならなかつた。

「なんだと、もう一度言つてみろ」

「何度だつて言つわよ！ 暴君！ 暴君！ 暴君！ 暴君！」

「きさま……」

目の前の女のあまりの暴言に、カディイスの全身が怒りで震える。

「わたしだつてね、好きでこんなところにいるんじゃないのよ！ 元

の体に戻れるなら喜んで戻つてやるわ！ 分かつたか、この馬鹿王

「！」

そう絶叫したイルーシャに、カディスは啞然とした。

なんだ、この女は。

まるで伝説の姫君らしくない。

イルーシャが王である自分を睨みつけてくるのも、カディスは気に食わなかつた。

この騒ぎを聞きつけたのか、途中で宰相のアリストと宰相補佐のイザトがそれに加わつた。

「伝説の姫君は随分と個性的な方のようじゃの」

本来諫める立場のアリストが楽しそうに言つ。

「……個性的にも程があると思うが。いくら古の王の妃でも現王を馬鹿呼ばわりとは」

「古の王妃ってなに？」

カディスの言葉に反応したイルーシャが信じられないようなことを口にした。キースが説明すると、今度はアークリッド王つて誰といふ発言をする。

まさか、この女記憶がないのか。

カディスは内心驚きながらも、辛辣な口調でイルーシャに言つた。

「呆れた女だな、おまえは。アークリッド王の人生を狂わせておきながら、その王のことも忘れたのか」

「なに、ひょっとしてイルーシャ姫つて物凄い悪女だつたりするの？」

「おまえ、何を言つてるんだ。まるで他人事のようだ……」

「仕方ないとと思うよ。実際、他人事だからね。信じられないかもしないけど、この娘、姿はイルーシャ姫だけど中身はヨーキつて女の子なんだ」

イルーシャ姫でなく、中身が別人だと？

さりにキースは信じられないようなことを言った。

「……異世界人だと？ なにを馬鹿なことを

そこまで行くとまさに夢物語だ。

カディスは呆れ果ててキースを見るが、当人は真面目な顔をしている。

そこでいつたんその話は中断となり、場を移動してすることとなつた。

主立つた者を場を陽の間に集め、しばらくイルーシャへの自己紹介が続いた。それが収まるごと、今度はイルーシャが自己紹介する。

「あ、わたしは由希、原田由希です。日本から来ました」

聞き慣れない発音の単語。どうやらこれが名前らしい。

「……失礼ですが、あなたはイルーシャ様では？」

「ええと、体はイルーシャなんですが、中身は原田由希なんです」「は？」

三人の騎士団長が訳が分からぬといふ様子を見せたので、イルーシャはどう説明しようかと思案しているようだ。

「見る、キース。こんな荒唐無稽な話、誰も信じないぞ。おまけにこの女が異世界人だと？ おまえ、この女におかしなことでも吹き込まれたんじゃないのか？」

「ちょっと、失礼なこと言わないでよね。それじゃ、まるでわたしがだましてるみたいじゃない」

カディスの言葉にむつとしたようにイルーシャが反応する。だが、カディスはそれに冷たく返した。

「実際そうだろ？」

すると、有無を言わせない様子でキースが一人の間の険悪な雰囲気を断ち切つた。

「カディス、ちょっと黙つてくれないかな」

この従兄弟は温厚そうに見えるが、本気で怒らせると後が怖い。仕方なくカディスは口を噤んだ。

「ヨークのいた二ホンという国はどんな国なんだい？」

「ええと、日本は四方を海に囲まれた島国だよ。工業が盛んかな。

一応経済大国って言われる」

「……島国で経済大国。聞いたことないですね」

「あ、じゃあ、アメリカは？ ロシア、イギリス、フランス、イタリア、ドイツ、オーストラリア」

イルーシャが国の名らしきものを列挙するが、どれにも聞き覚えはなかつた。

「どれも知らん。キース知つているか」

「どの国もこの世界には存在しないよ。だから言つただろう、ヨー

キは異世界人だつて」

世界中を移動して見て回つてゐるキースがそう言つのなら確かに  
そうなのかもしない。……だが。

「しかし、それもその女の作り話だと言えなくもないぞ」

「彼女はイルーシャ姫やこの世界のことについて知らなさすぎる。  
実際に鏡で自分の姿を見て驚いてた彼女を目にしてれば、カディス  
も納得すると思うよ」

キースがそう言つた途端、イルーシャは赤面して頬を押された。  
キースがそう言つほど、イルーシャのその時の驚き様は凄まじかつ  
たのだろう。

カディスはイルーシャの顔をまじまじと見つめると、しばらくし  
てから溜息をついて言つた。

「……おまえがそこまで言うのなら仕方ない。一応信じてやる」  
正確には信じるしかないといったところか。

イルーシャ姫の中身が異世界の娘だと、稀代の魔術師であるキー  
スがこうもはつきり言つているのだ。

とても信じられないが、そうでなければ、王を馬鹿といつ古の王  
妃がいるとも思えない。

それから、カディスのその発言を皮切りにして食事会へと移行し  
たのだが。

果たして自分の現在の状況が分かっているのだが、目の前に座る女が食事を口にして幸せそうに微笑んだ。

随分と旨そうに食べるのだな。

カディスは一瞬、イルーシャへの反感も忘れ、彼女に見入つてしまつた。

本人は気がついていないらしいが、周囲の人間も微笑ましそうにそれを見ている。

いつもこんな顔をしていれば可愛げがあるものを。

カディスは目の前のイルーシャのにこやかな顔を見つめながら思う。

それから話題はイルーシャの言語能力についてになり、書取は自信がないとイルーシャがこぼした。

「おまえには専任の教師をつけてやるから安心しろ。たっぷり絞らせてやるから覚悟しておけ」

今までの鬱憤を晴らすようにカディスが言つと、イルーシャは情けない声を出した。

どうやらイルーシャは学ぶのがあまり好きではないらしい。

「勉強はやるけど、できれば元の世界に帰りたいんだよね……」

幸せそうに食事をしていたかと思えば、今度は溜息をつきながらイルーシャが言った。

……帰る？　この女が？

そう思った途端、カディスの胸に妙な痛みが走った。

「……しかし、妙な期待を持つより、帰れないと思っておいた方が賢明ではないか？　そんなことを考えていたら、いつまでたつてもこの環境に順応できないぞ」

なぜかこの時、カディスはイルーシャを帰したくないと思つてしまつていた。

気づいたら、先程とは真逆のことを口にしていた。

「この女が貴重な観光資源ならば、無理に返すこともないだろ？」

そう言つと、イルーシャが涙をはらはらと流し始めたのでカディスは驚いた。

「い」「ごめんなさい、わたし……」

「……なにを泣いている。別に泣くようなことではないだろ？」

まさか泣かれるとは思つていなかつたカディスは動搖して言つた。  
「わ、わたし、もう部屋に戻るね。食事ごちそうさま」

キースが移動魔法を唱えてイルーシャが部屋に戻ると、皆からの集中攻撃がカディスに浴びせられた。

「陛下、あれではいくらなんでもイルーシャ様がお可哀想です」

「陛下はイルーシャ様を嫌つておられるのですか？ それにしてもあのおつしやり様はどうかと思われます」

「陛下は少し女性に対する言葉遣いを考えて口にする必要がありそうじやの」

「それにはわたしも同意しますね。陛下は女性の扱いを」存じではありませんから」

「陛下……女性を泣かせるのはいかがなものかと存じます」

「カディス……、あの娘を泣かせたツケは後できつちり払つてもらうよ」

こうして、カディスにとつては散々な形で食事会はお開きになつた。

「帰りたい」

イルーシャが寝台の端に座つて泣いている。

はらはらと涙を流すイルーシャに庇護欲を刺激されるが、けれどそれ以上に。

「帰さない」

「カディス……」

カディスはその華奢な手首を拘束し、イルーシャに口付ける。そ

してその上に覆い被さり。

「 つ！」

カディスに思つまま支配されて、イルーシャが声にならない悲鳴を上げる。

「力、ディス……ッ、お願い、やめ、て……っ」

切れ切れの懇願と、甘い啼き声。

愉悦に浸るカディスは、イルーシャの白い肌に己のものだといふ印を刻んだ。

「陛下、おはよづござります」

扉を叩く音と共にリイナの声がして、カディスは目を覚ました。そして今まで見ていたのが夢だと気がつく。

「……あの女はどうしてる」

入室してきたリイナに尋ねると、彼女はそつなく答えた。  
「イルーシャ様でしたら、先程起きていらっしゃられて、今湯浴み中でござります」

「 そうか」

湯浴みという言葉から、一瞬先程見ていた夢の内容が浮かんできて、それを書き消すようにカディスは軽く首を振った。

イルーシャが怒る顔。微笑む顔。泣く顔。

カディスが報告書を読む間もイルーシャの顔がちらつく。

なぜだ。なぜこんなにもあの女のことが気にかかる。  
「なにかご機嫌斜めだね、カディス」

次々と浮かぶイルーシャの映像にいらいらしながら報告書を決裁していると、キースが新たな報告書を提出しにきた。

「あ、あの娘が来たみたいだ。僕はちょっと隠れるよ」「なんだと？」

聞く間もなくキースが姿を消した後、その言葉通りに、イルーシヤはやつてきた。

「またおまえか」

溜息をついてそう言ひつと、ムツとしたようにイルーシャは眉を寄せた。

なんの用だと思つていると、その口から出てきたのは、アイリンとの結婚を考え直してくれとの願いだった。

イルーシャによると、アイリンには想い人がいて、その相手と駆け落ちしようつとまで思い詰めていたとのことだった。

しかし、どうやらイルーシャは本気でアイリンの身を案じて言つているらしい。

この女は、どうして会つて間もない姫の身をそこまで心配できるんだ？

「好きな人がいる、か。それがどうしたというんだ。王族や貴族の結婚は、恋愛感情などとは無縁のものだ。おまえには政略というものが分かつていらないようだな」

中身が一般庶民であるイルーシャは、それがどんなに大事なことが理解できていないらしい。そのことに、なんとなくカディスはいらついた。

「でも、少なくともカディスは姫のこと好きだよね？」

無邪気に発せられるイルーシャの言葉に、カディスのいらつきは頂点に至つた。

俺がアイリンのこと好きだと？　この女は人の気も知らずに。

先程まで次々と脳裏に浮かぶイルーシャに苦しめられたこともあり、カディスは苛立ちを彼女にぶつけた。

「好きとか嫌いとかの問題ではない。本当に口の減らない女だな、おまえは」

カディイスがそう言つと、イルーシャは少し焦つたようだつた。

それに少し愉悦を覚えながらもカディイスはさうに言つた。

「……そうだな、どうしてもと言つなら、考えてやらなくもないぞ

「え、本当！？」

田に見えて浮かれるイルーシャに、喜ぶのはまだ早いとカディイスはほくそ笑む。

「アイリンが駄目なら、おまえが代わりに王妃になる」となるが、それでもいいか？」

「え……？」

その後のイルーシャは、カディイスの予想通り慌てふためき、自分は人妻だから王妃にはなれないと叫んだ。

その様子がおかしくて、カディイスはくつと笑い出すと、イルーシャの腕を引いて抱きしめた。

すると、なんとも言えない柔らかい感触がして、このまま抱きしめていたい気持ちにカディイスは駆られた。

……なるほど、この体ならアークリッド王が骨抜きになつたのも分かる。

その背を撫でると、途端にびくりとイルーシャの体が反応した。その時の未知の感覚に戸惑うようなイルーシャの表情に艶を感じて、カディイスは心が震えた。

あの表情をもう一度見たい。

そう思つてカディイスが背中を撫でていると、思い切りイルーシャが罵つて暴れた。

「なに人の背中撫で回してゐのよ、この馬鹿　つー」

この女ときたら、口は悪いわ、暴れるわ、とんだじやじや馬だ。けれど、この女なら退屈しそうにないな。

周囲に相手を決められるのは冗談ではないが、この女ならば王妃にしてもいい。

カディスは楽しげに笑みを浮かべながら、イルーシャが暴れるのをものともせずに、その柔らかい体を堪能した。

## 花戦争～カディイス～ 第一章終了直後

イルーシャは今どうしてるだろうか。  
また沈んではいなうか。

元の体を無くし、自分の世界に戻れなくなってしまったイルーシャ。

周囲に心配せまいと無理に明るく振る舞うイルーシャに、カディスは心を痛めていた。

弱くはないが強くもない少女を思つて公務に身が入らないカディスを宰相補佐のイザトが咎める。

「陛下、手にされている書類が逆です」

「あ、ああ……」

返事をしながら、カディスは内心しまつたと思つ。

「この男は仕事は完璧だが、自他共に厳しすぎる傾向にある。これから辛辣な小言が繰り出されるぞとカディスは覚悟した。  
しかし、その口から出たのは意外な言葉だった。

「陛下、そんなに気になるのでしたら、イルーシャ様に会いに行かれてはどうですか。このままでは公務に支障が出ますし」

「……なぜイルーシャのことだと分かった」

「気が付かれていなうですが陛下、先程からイルーシャ様の名前を呟かれています」

それを聞いて、これは相当重傷だとカディスは額を押さえた。

「花をひとつぞ、お姫様」

「わあ、綺麗。ありがと、キース」

カディスがイルーシャの様子を見に部屋を訪れる、そんな光景

が繰り広げられていた。

キースから白を基調とした花束を受け取つてイルーシャが嬉しそうに微笑む。

「……こいつは本当に如才ないな。

おもしろくない気分になりながらカデイスはイルーシャに聞いた。

「……花が好きだったのか？」

「うん、まあ、人並みには好きだよ」

「……なにか、意外だな」

「なにそれ。わたしには花は似合わないってこと?」

むつとしたようにイルーシャが薄紅色の唇を尖らせる。

「そういう意味ではない。おまえは着飾るのも好きではないようだし、あまりこういうのに興味はないのかと思っていた」

着飾るどころか、庭師を見て「いいな、動きやすそう」とイルーシャが呟いていたのに驚いたくらいだ。……どここの世界に庭師の格好をしたがる姫君がいるのか。

イルーシャの考え方自体がカデイスの理解の範疇を超えていた。

「花が好きなら俺もなにか贈るが。なにがいい?」

「……うーん、わたし、こここの世界の花の名前あんまり知らないんだよね。……あ、そうだ、オレンジ色の花がいいな

「橙色?」

「うん、そう。オレンジって明るくて可愛いでしょ」

「おまえが欲しいのなら希望に添うようにするが……なにか似合わないな。おまえなら青や白が似合うと思つたが」

「いいじゃない、好きなんだから。……青い花も好きだけどね。ナルフィニウムとかルリマツリとか

「デル……?」

イルーシャは花の名前をあげたらしげが、カデイスには全く理解できなかつた。

「……橙色の花だな。分かつた」

「あれ、もう戻るの? お茶くらい飲んでいけばいいのに」

執務室に戻ろうとするカディイスをイルーシャが引き留めた。

「まだ整理しなければならない書類があるからな。今日はおまえの顔を見に来ただけだ」

「……なんか、心配かけちゃつてるみたいで」「めんね  
「おまえが気にすることじやない。ではな」

しゅんとしたイルーシャの髪をそつと梳くと、カディイスはイザトの待つ執務室へと戻った。

「随分早かつたですね」

「ああ、顔を見に行つただけだからな」

イルーシャが今キースと一緒にいるかと思うとムカついたが。  
「おまえに相談があるのだが、イルーシャは橙色の花が好きらしい。  
何の花を贈つたらいいだろうか」

カディイスの問いに、イザトが首を傾けて考える素振りをした。  
「花……ですか。やはり薔薇が一番無難なのではないでしょうか」

「……薔薇か」

それなら華やかだし、見栄えがするか。

カディイスは少し考えると頷いた。

「そうだな、薔薇にするか」

次の日。

示し合わせたわけでもないのに、なぜかカディイスとキース、二人揃つてイルーシャの部屋を訪れていた。

キースが差し出したのは、黄味がかつた橙色の可憐な花束。

「わあ、サンダーソニアだー、可愛いー！ キース、ありがとうー！」

「……鐘草？ それが好きなのか？」

「あ、ここでは鐘草って言うんだー。うん、好きだよ。ここにもあるんだね、サンダーソニア。嬉しいー」

「そんなに喜んでくれて、僕も嬉しいよ

満面の笑みを浮かべるイルーシャに、キースも相好を崩す。

随分可愛らしい花が好きなのだな、とカディイスは眉を顰めた。：

薔薇を選んだのは失敗だつたか。

「……おまえが気に入るかどうか分からんが……」

カディイスは後ろ手に持っていた花束を差し出す。

「あ、オレンジの薔薇だー。この色の薔薇も可愛くて大好きだよ

！本当にありがとう！」

手を叩いて喜ぶイルーシャに、橙色の花ならなんでも好きなので  
はないかと頭によぎつたが、カディイスはその言葉を飲み込んだ。  
イルーシャは喜んでいるようだし、それでいいと思えたからだ。

早く元気になれ、イルーシャ。

こんな花束でおまえが笑ってくれるなら、いくらでも贈ろう。

それからしばらく、カディイスに橙色の花を贈り続けられたイルーシャが呆れたように言った。

「花を贈ってくれるのは本当にありがたいけど、いくら好きって言つても程度つてもものがあるでしょ。……悪いけど、次は他の色にしてね」

「……ああ、分かった」

さすがのカディイスも少々落ち込みながら頷く。

ちなみにキースはちゃんと他の色の花束も贈つていた。……  
やはりこの男は油断ならない。

「カディイスつてやることが極端だよね」

「……悪いか」

「別に悪くないよ。でも見てて少し面白かったかもね」

「……おまえ、性格悪すぎるぞ」

「そういうカディイスも結構いい性格してると思つよ」

王であるカティスの言葉に怯む」ともなく、キースが「ともなげに返した。

そして、じつやつてこの恋敵を押し退けてやるうかとカティスとキースは水面下で火花を散らす。

花戦争はまだ終わらない。

花戦争／カティス／

第一章終了直後（後書き）

別名、花瓶大活躍。

「イルーシャが目覚めないと……？ なにを馬鹿な

昨夜床に着いたイルーシャが夕方になつても起きてこない。執務に就いていたカディスがリイナからそう報告を受け、信じられないと言つように首を横に振つた。

「陛下、誠でござります。なんどお声をかけても、搖すつても、イルーシャ様の反応がござりません」

「……」

思えば、イルーシャは昨日思い詰めて、月読の塔に封印してくれとキースに懇願するまでだつた。

どうやつたのかは分からぬが、イルーシャは自分自身で現実を否定してしまつた可能性が高い。

「キースを呼べ。いますぐにだ」

恋敵ではあるが、こういう状況で一番頼りになるのは、従兄弟であるキースしかいなかつた。

「はい、かしこまりました」

「……俺がイルーシャの寝室に入つても問題はないな？」

「はい、わたくしたちでイルーシャ様を着替えさせました故、大丈夫でござります。」

「そつか、分かつた。すぐ向かう」

俺はそこまでおまえを追いつめたのか、イルーシャ。

彼女を永遠に失つてしまふかもしれない可能性に怯えながら、カディスは自省する。

だが、今はイルーシャの様子を見るのが先だとカディスは考え、溜息をつきながら執務室から出、彼女の部屋へと向かつた。

カディスがイルーシャの寝室に入った時には、既にそこにキースがいた。

キースはイルーシャの額に手を当てて、なにかを考え込んでいる様子だつた。

「キース！ イルーシャは……っ」

その間から見えるイルーシャはまるで人形のようで、思わずカディスは叫ぶ。

イルーシャが病人であつたとすれば、カディスも自重しただらうが、今回はまた話が別だ。

カディスはイルーシャがうるさがつて目覚めれば良いのと願わずにはいられなかつた。

リイナ達が普段の衣装に着替えさせたイルーシャは、相変わらず美しい。

ただ寝台に横たわつた彼女が、この騒がしさにも関わらず毎々と眠つているのが少々異様に見えた。

やがてキースはイルーシャの額から手をどかすと、カディスに向き直つた。

「キース、なにか分かつたか？ イルーシャにいつたいなにがあつたんだ」

「分からぬ。……ただ、驚くほど彼女の魔力が稀薄になつてゐるまるで、どこかの空間に吸い込まれでもしたみたいだ」

カディスは要領を得ないキースの言葉に首を傾げる。

結局分かつたことは、キースにもイルーシャがこうなつた原因が分からぬと言つことだけだつた。

カディスが更にキースに質問しようとしたところへイルーシャの求婚者の一人の騎士と、なぜかマーティンまで寝室に飛び込んできた。

「イルーシャ様が目覚められないとか」

「いつたいどうなされたのです、イルーシャ様は」

「イルーシャ様はまさかもう目覚められないのですか！？」

「マーティンのその言葉に、カティスは目を剥いて怒鳴った。

「縁起でもないことを言つた！」

「も、申し訳ございません」

「キース様、イルーシャ様をこのままにしていては衰弱されてしまうのでは？」

マーティンがうろたえている傍で、内心ではどう思つているのかは計り知れなかつたが、比較的冷静に眠るイルーシャを見てヒューイが言う。

他の二名は心配を隠せずにイルーシャを見つめている。

「ああ、それは既にイルーシャの時を止めてあるから大丈夫だよ。かと言つて、このままにする訳にもいかないけれど」

「……なにか方策がおありになるのですか」

ブランドレイがキースにそう尋ねると、その場にいた者全員が一斉に彼を見た。

「イルーシャは眠る前に過去視の訓練をしていたそうだ。もしかしたらイルーシャの意識は過去に行つているのかもしれない。……そう考えれば、彼女の魔力が稀薄なのも説明が付く

「過去に……」

思つてもいなかつたキースの言葉に、皆が呆然と呟く。

「……仮にそうだとして、どうやってイルーシャを元に戻すんだ。自然にまかせるのか？ どうなんだ、キース」

カディスがハツ当たりにも似た調子で、キースに詰問する。

他の三人の騎士達はカディスを諫めることも忘れてただキースの動向を見守る。

愛しいイルーシャを元に戻すことが出来るのは、キースしかいないだろうということをこの場にいる者達全員が嫌と言つほど感じていた。

キースはカデイスのきつい言葉を特に気にした風もなく意識のないイルーシャを見つめていたが、やがて言った。

「……とりあえずイルーシャの魔力を辿つてみるよ。イルーシャがなぜ眠つたままのかくらいは分かるかもしね」

彼女を必ず助ける、とはキースは明言しなかつた。

それほど、今回の件は稀代の魔術師であるキースにも厄介なのだろう。

不満はあつたが、仕方ない、とカデイスが息をついた。

結局はキースがいなければイルーシャは元には戻らないのだ。

「頼んだぞ、キース」

自分にキース程の魔力があれば他の男などにイルーシャを任せないものを。

そこまで考えて、この場にいる騎士達も同じ思いだらうといふことに気が付き、カデイスは内心で苦笑した。

彼女を救うのが自分ではないことは癪ではあつたが、しかしまたイルーシャの笑顔が見られるのであれば、なんでもないことだ。

戻つてこい、イルーシャ。

イルーシャの額に手を当てて静かにその魔力を探つているキースを見つめながら、カデイス達はイルーシャの帰還を心から望んでいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8847p/>

---

月読の塔の姫君 番外編

2011年8月13日03時19分発行